

聖書：コリント人への手紙第一 15：35～49

説教題：天に属する方のかたち

日時：2023年2月19日（朝拝）

コリント教会の中には、12節に記されていましたが、「死者の復活はない」と主張する人たちがいました。これは当時のギリシャ世界で生活していたコリント人にとっては自然な考えだったかもしれません。当時の人々は人間をたましいと肉体の二つに分けて考え、たましいは人間の気高い部分として高く評価する一方、肉体はより劣った部分として軽蔑していました。従ってたましいの救いは強調しても、からだは死の時に脱ぎ捨てるもの、滅ぶべきものと考えていました。そのように考えて来た彼らにとって、死んで肉体から解放されたたましいが天で再びからだを持つなどという考えはとても受け入れられないものだったのでしょうか。それが35節の問いの背後にあります。「死者はどのようにしてよみがえるのか。どのようなからだで来るのか。」これに答えるようにしてパウロはここでやがての復活のからだについて語って行きます。

まずパウロは「愚かな人だ」と言います。最初から厳しい言葉ですが、これは復活はないと主張する人たちに向けての言葉です。かつてイエス様が復活を否定するサドカイ人らに語られた次の言葉が思い起こされます。マタイの福音書22章29節：「あなたがたは聖書も神の力も知らないのに、思い違いをしています。」そしてパウロは自然界に示されている様々な神の力を指し示します。まず一つ目は蒔いた種とその後にできるからだのことで、蒔くものは37節にあるように「ただの種粒」です。これは直訳すれば「裸の種」です。それを地面に蒔くとどうなるでしょう。それは土の中で一旦解体します。つまり死にたとえられる状態になります。ところがその後で先の姿からは想像もできないようなものが現れて来ます。瑞々しい若葉が芽を出し、花を咲かせ、やがて実が結ばれます。あの裸の種からどうしてこのようなものが出来たのだろうかと思われるような結果です。これは神のわざによることです。つまりパウロが言いたいことは、今の私たちのからだは死んで葬られた後、思ってもみなかった素晴らしいからだを与えられることを、この植物の例は教えているのではないかということです。言い方を換えれば今の私たちのからだの観察から後の復活のからだを云々することはできないということです。神はみこころのままに素晴らしいからだを与えてくださいます。押さえておくべきことは、そこにあるアイデンティティーは同じと

ということです。種と後にできる実には同一性、連続性があります。しかし死を経て大きな変革が生じます。今のからだからは想像できないようなからだを神はみこころのままに与えてくださるのです。

次にパウロは神が御心のままに色々なからだを与えることができる例を、さらに自然界にあるものを用いて示して行きます。まず 39 節で「どんな肉も同じではなく、人間の肉、獣の肉、鳥の肉、魚の肉、それぞれ違います」と言います。それらのからはバラエティーに富んでいます。どうして獣はあんなに速く走れるのか。どうして鳥はあんなに高く飛べるのか。どうして魚はあんなにすいすい水の中を泳げるのか。私たちには不思議に思われる色々なからだがあります。また世界の中には私たちの知らない動物が沢山存在し、テレビ等で紹介される映像を見て、よくもまあこんな不思議な生き物を神はお造りになったものだとただただ驚嘆させられることがあります。とするなら復活のからだについて私たちは自分の頭で考えられることにのみ限定して考えることはできないのではないのでしょうか。神は私たちの考えをはるかに超えて、驚嘆せざるを得ないような、天での生活にふさわしいからだを与えてくださることができるのではないのでしょうか。

さらに地上のからだばかりでなく天上のからだもあるとして、様々な天体をパウロは指し示します。41 節に太陽、月、星があげられ、星と星の間でも輝きが違うと言われます。太陽系にある星だけを考えても一つ一つ性質が異なります。さらに銀河系、さらにその先まであることを考えると私たちの頭はもうついて行けません。神は果てしない力を持って色々なからだを御心のままに与えておられます。

そこでパウロは 42 節で言います。「死者の復活もこれと同じです」と。そして復活のからは今のからだと比べてどのように違うかが 4 つの言葉で語られます。まず一つ目として 42 節に「朽ちるもので蒔かれ」とあります。「蒔かれる」とは先の種粒のイメージと同じで、私たちが死んで葬られることを指す表現です。やがて蒔かれ、葬られる私たちのからは「朽ちるもの」と言われます。確かに私たちの今のからは生まれた瞬間から死に向かって朽ちて行きます。若い頃、ある症状があって病院で診てもらったところ、25 歳くらいから骨の老化は始まると言われてショックを受けたことがありました。私たちの今のからだには腐敗の種があり、病気にかかりやすく、時間とともに衰え、壊れる方向に進みます。しかしやがてよみがえらされるからは「朽

ちないもの」と言われます。病気にかかることも壊れることもなく、永遠に朽ちないいのちを楽しむことのできるからだであると言うのです。二つ目に 43 節で今のからだは「卑しいもの」と言われています。神が与えてくださった今のからだはそれ自身卑しいものではありませんが、後に来るものに比べればやはりみすぼらしいものと言わざるを得ないということでしょうか。それに比べて後の復活のからだは「栄光あるもの」と言われます。三つ目は「弱いもの」。私たちの今のからだは数時間働くだけで疲れてしまいます。少し働くとすぐ休みを必要とします。何をしても自分のからだの弱さを意識させられ、人間の力の限界を思い知らされます。死が近づけば益々無力さを覚えさせられるでしょう。しかしやがてのからだは「力あるもの」と言われています。私たちは御国でいくら働いても少しも疲れないう強いからだをいただくのです。そして四つ目に今のからだは「血肉のからだ」と言われる一方、復活のからだは「御霊に属するからだ」と言われます。血肉のからだと言われている言葉は、生まれながらのからだという意味で、今の私たちの自然なからだを指します。一方の「御霊に属するからだ」あるいは 44 節後半にある「御霊のからだ」とは御霊の完全な支配のもとにあるからだという意味です。聖霊の祝福に満ち溢れるからだです。これまで見て来た「朽ちないからだ」「栄光あるからだ」「力あるからだ」は御霊の十二分な祝福を表現したものであると言えます。

さらにこのことをパウロは 45 節以降でアダムとキリストの関係から語って行きます。全人類をアダムとキリストという神が立てた二人の代表者で捉えるという見方は、すでに 21～22 節にも示されていました。今見ている 45 節にも「最初のアダム」、そして「最後のアダム」という表現があります。「最初の人アダムは生きるものとなった。」という括弧で括られている言葉は創世記 2 章 7 節からの引用です。創世記 2 章 7 節：「神である主は、その大地のちりて人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。それで人は生きるものとなった。」パウロはこれを引用した後、「しかし、最後のアダムはいのちを与える御霊となりました」と言います。これはどういう意味でしょうか。最初の人アダムは生きる者となり、本来は神に従う歩みを経て、目標である永遠の命に到達すべきでした。それは「朽ちないからだ」「栄光あるからだ」「力あるからだ」「御霊のからだ」に到達するということでもありました。しかし最初の人アダムが罪を犯したことによって全人類に死が入りました。もはや人間は自力ではその目標に到達できなくなりました。そこで神は最初の人アダムが全人類に対して持っていたのと同じような特別な立場を持つ第二のアダム、キリストを立てて遣わしてくだ

さいました。このキリストは「最後のアダム」と言われています。これはもはやその次のアダム、第三のアダムは不要であることを示しています。この最後のアダムは人として神の御心に完全に従う歩みをその地上の生涯でささげ、またすべての人の罪をその身に背負って身代わりの代償を払うというわざを十字架上で成し遂げ、そのわざを完遂なさった方として三日目に死より復活されました。そうしてキリストは「いのちを与える御霊」となられたのです。この方において、神が本来人間に意図した祝福に人間はあずかることができるようにされたのです。最初にあったのは血肉です。御霊のものは後に来ます。その御霊のものを獲得できなかった最初のアダムに代わって、最後のアダム（キリスト）がこれを獲得し、ご自分に連なるすべての者に御霊のものを与えることができる方となられたのです。

47 節に「第一の人は地から出て、土で造られた人ですが」とあります。「土で」という部分は「ちりで」という言葉で、これは創世記 2 章 7 節で人は「大地のちり」から造られたと言われたことを受けたものです。人間はそのようなものとまず造られ、神に従う歩みを通して御霊のからだに到達すべきでした。しかしそれができなかった第一の人に代わり、第二の人キリストがその道を進み、ついに天に属する状態に入りました。47 節の「天から出た」という表現を読むと、キリストは天から来たと言っているように読めますが、続く 48～49 節では「天に属する方」と言い換えられています。この意味はこれまで見て来た通り、最後のアダムであるキリストが地上の生涯を通して天に属する状態に入られたことを意味しています。48 節に「土で造られた者たちはみな、この土で造られた人に似ており」とあるように、私たちは最初の人アダムの子孫としてアダムと同じ性質を受け継ぎ、今もそういう状態で生きています。そしてもしそれだけなら、ただその状態にあるだけです。しかし第二の人キリストはアダムが成し遂げられなかった神に従う正しい歩みを成し遂げて今や天に入り、天に属する方となられました。そのキリストにつながる者たちは、今や「いのちを与える御霊」となられたキリストと結ばれ、その方がくださる祝福にあずかって、その方に似る者とされて行きます。そして最後の 49 節にあるように「天に属する方のかたちを持つ」者とされるのです。これは一言で言えばキリストに似る者とされるということなのです。先に天の栄光に入られたキリストの状態に似る者とされるということなのです。

果たして第二の人、そして最後のアダムであると言われるキリストは今どんなからだを持っておられるのでしょうか。復活後のキリストを見た人たちは沢山いました。

十二使徒に加えて500人以上の兄弟たちに同時にキリストは現れたことがこの章6節に記されていました。復活後のイエス様には以前と異なった印象を与える面があったことが福音書のいくつかの箇所暗示されています。それはイエス様が栄光の状態に入ったことを示すものです。しかしまだ天に入ってはいません。では昇天後のキリストを見た人はいるのでしょうか。それはパウロです。ダマスコ途上で彼は復活のキリストにお会いしました。使徒の働き26章13節に、その光は「太陽よりも明るく輝いて」と記されています。しかしそれはまだ地上にあるパウロが見ることを許された姿でしたから、彼に合わせた、より光を落とした姿だったろうと言われます。私たちはキリストの本当のお姿をやがての復活の日に初めて見ると聖書で言われています。ヨハネの手紙第一3章2節：「愛する者たち、私たちは今すでに神の子どもです。やがてどのようになるのか、まだ明らかにされていません。しかし、私たちは、キリストが現れたときに、キリストに似た者になることは知っています。キリストをありのままに見るからです。」 私たちはその時、この上ない輝きに包まれたキリストの本当のお姿を初めて見ます。そして素晴らしいことに何とその時、私たちは自分もそのキリストに似る者とされていることを発見すると言います。これがまさに今日の箇所で行われている「天に属する方のかたち」です。同じことはピリピ人への手紙3章21節でこう行われています。「キリストは、万物をご自分に従わせることさえできる御力によって、私たちの卑しいからだを、ご自分の栄光に輝くからだと同じ姿に変えてくださいます。」 またマタイの福音書13章43節で次のように言われたイエス様の言葉も思い起こされます。「そのとき、正しい人たちは彼らの父の御国で太陽のように輝きます。」 パウロがダマスコ途上で太陽よりもまばゆく輝くイエス様を見たように、私たちがかの日にそのように輝く者とされると聖書は言います。何という将来が神が立てた第二のアダム（キリスト）により頼む者たちの行く先に用意されていることでしょうか。

神は最初に人間をたましいとからだの両方を持つ存在として造られました。ですからその救いはたましいだけではなくからだも含むと聖書は語ります。そしてそのからだは天での生活にふさわしいものとされます。それはアダムが踏み行くことができなかった道を最後まで踏み行き、先に天の栄光へ入られた第二の人、キリストとつながる人に与えられる恵みです。私たちはそのことを思って最後のアダム、そして今や天に属する方となられたキリストにつながり、その方に従う歩みへ進む者とされたいと思います。また私たちの「からだ」がこのように神の御前に大切な位置を持ち、救わ

れるものであるなら、それは今ここでの私たちのからだの使い方にも大きな影響を与えるべきでしょう。私たちのからだは重要なものです。ギリシャ人が見たように、より下等な見下すべき部分ではありません。私たちのからだも神のかたちに造られた人間の尊い一部です。確かに今ここでの私たちのからだには様々な弱さが付きまとい、限界があり、悩みもありますが、このからだも贖われるのです。やがて天に属する方のかたちへと復活します。その日を見据えて心だけではなくこのからだも神にささげて歩む者へ導かれないと思いません。そしてやがて朽ちることのない栄光のからだに復活させられ、そのからだをもって益々神の栄光を現し、神を永遠に喜ぶ真の幸い、真の救いに生きる者へと導かれないと思いません。